

耕平さんかわら版

発行編集部

大塚耕平事務所

☎052-757-1955

Kouhei@oh-Kouhei.org



皆さん、こんにちは。春が待ち遠しい季節になりましたが、まだまだ寒い日が続きます。新型コロナウイルス感染症も含め、くれぐれもご自愛ください。

かわら版では日常会話の中にも含まれている仏教用語をご紹介します。知らず知らずのうちに使っている仏教用語。それだけ日本人の生活に溶け込んでいるということなのです。

去年からコロナ禍に直面し、大変な状況が続いています。コロナ禍前の話題やニュースはすっかり色褪せてしまい、思い出せないほどです。とかく世間はそんなもの。アツという間に過去のことを忘れます。コロナ禍も早く収束し、そうなると思いますね。

夏目漱石の名作「草枕」の冒頭の一節に「智に働けば角が立つ、情に棹(さお)させば流される、意地を通せば窮屈だ。兎角(とかく)この世は住みにくい。」とあります。

こと」の喩えとして「兎角」という言葉が使われていました。

十一〜十二世紀頃、宋の時代の「述異記」という書物の中に「兎に毛を生じたり、兎に角を生ずるのは、兵乱の兆し」という記述があります。あつてはならないことが起きる凶事の予兆の喩えとして使われ、「兎角毛」という表現が定着しました。「楞伽經(りようがきょう)」

「毘婆沙論(びばしやろん)」という仏経典の中にも「言葉は妄想であつて、兎角兎毛のようなもの」とか「輪廻転用する人間は、兎角兎毛のごときもの」という表現がでてきます。

いずれの経典も五世紀頃のものであり、中国の古典で「兎角兎毛」という表現が定着するよりも早い時期に仏教用語として使われていたようです。

「ありえないこと」の比喩ですが、夏目漱石が使っている「兎角」は「何にしても」「いずれにせよ」というような接続詞的役割を果たしており、既に意味が変わっています。ちなみに夏目漱石は「兎角」という表現を作品の中で多用しており、お気に入りの言葉だったようです。さらに日常用語としては「と

にかく」「ともかく」のように、「に」「も」を挟む使い方もされます。

「とにかく」も「兎に角」と書く場合がありますが、日本語文法的には、「とにかく」の「と」は「そのように」、「とにかく」の「かく」は「このように」という意味を指す副詞。つまり、副詞が組み合わさってできた単語です。

「とにかく」に似た言葉が「ともかく」。やはり「兎も角」と書く場合があります。「とにかく」も「ともかく」も「何にしても」「いずれにせよ」という意味であり、夏目漱石が使っていた「兎角」とほぼ同じような語感です。

余談ですが、空海の名作「三教指帰(さんこうしきき)」という小説風仏教書には、「兎角公」という家主、「兎毛先生」という儒家が登場します。この頃には「兎角兎毛」が定着していた証(あかし)ですね。

それではまた来月、ごきげんよう。

※

耕平

豊田 (3回シリーズ) 1~3月 中日文化センター/暮らしの中の仏教 三河新四国を旅する



本四国の「写し」霊場として、知多四国とともに全国のお遍路さんに知られる三河新四国。1626年(寛永2年)、浦野上人開創に遡り、1926年(昭和2年)、1965年(昭和40年)の二度にわたる再興を経て今日に至る歴史を旅します。そもそも邊地修行と言われたお遍路とは何か。お遍路の源流から旅は始まります。

講師 早稲田大学客員教授 大塚耕平

詳しくは下記フリーダイヤルまでお問合せください。

豊田 中日文化センター ☎0120-98-2841

